

資料(Data)

「センター試験は悪いテストだった」のか

A brief analysis on entrance exam from the view point of
secondary and higher education

高橋 伸行*
TAKAHASHI, Nobuyuki*

要 旨

大学入試における「新テスト」導入の動きをうけ、入学者選抜のありようを再考し、今後の中等教育、高等教育の方向性について問題提起した。

キーワード：高大接続、大学入試、センター試験

Key words : articulation between secondary and higher education, entrance exam for university, national center test for university admission

1. はじめに

2013年10月、政府の教育再生実行会議の提言を受け、文部科学省が大学入学者選抜（いわゆる入試。以下この用語）のための「新テスト」導入検討との報道が社会の大きな注目を浴びた。一年を経た2014年10月、中央教育審議会高大接続特別部会（以下中教審）の答申案の一部が明らかにされた（朝日新聞2014年10月25日デジタル版）。マスメディアの報道においては、「大学入試改革」という世間の耳目を引きやすい「目玉」に主眼がおかれている。しかし、今回ここまでに至る中教審の議論は、部会名が示すとおり、もっと大きな、中等教育、高等教育全体の構造に大なたをふるうべきであるとの強い意志を文部科学省（以下、文科省）に告げている。入試制度変更はその一部にすぎない。とはいえ、大学入試は、それ以下の教育機関の教育内容を大きく規定する。入試が改変される度に、進学校と呼ばれる高校を中心に動揺と混乱をもたらしてきた。

本稿では、今時答申の内容が実行された場合、入試はどう変わっていくのか。これまでの入試を振り返りながら、今後の中等教育、高等教育の行方を探る手がかりを提示したい。

* 椋山女学園大学教育学部「ケースメソッドⅠ（野崎健太郎クラス）」外部講師、
愛知県公立高等学校教諭

2. 改革の方向性

改革の方向性をみるために、中教審答申資料（中教審2014）から要旨を引く。

2-1. 問題意識と課題

- ① 世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに速く、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用しない。
- ② 高大接続の改革は、大学入試のみの改革ではない。現状の高校・大学教育、入試は、知識の暗記・再現に偏りがちで、思考力・判断力・表現力、主体性、協働する態度など、真の学力が十分に育成・評価されていない。
- ③ 数値（点数）に依存した、一度限りの一斉受験という特殊行事が人生最大の分岐点、目標となっている。

2-2. なすべき改革とは

- ① 一斉にかつ画一的に実施されるペーパー入試による選抜を「公平」とであると捉える既存の意識を改革しなければならない。
- ② そして、多様な方法で「公正」な選抜を行う。調査書、（高校等での）諸活動の記録、小論文、面接などを活用。
- ③ 知識・技能評価中心現行の大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」を出題する「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を新たに実施する。

3. きわめて簡略な大学入試史

ここでごく簡単にではあるが、戦後日本における入試の歴史を押さえておきたい。答申では、従来型の学力選抜を否定した上で、新しく2種類の共通テスト（「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」「高等学校基礎学力テスト（仮称）」）の導入を提言している。そこで、検証の対象として(1)大学入試センター試験（以下センター試験）を含む共通テスト、(2)現在行われている「一般の学力検査ではない選抜」、の2点について振り返る。

3-1. 「共通テスト」史

廃止が検討されているセンター試験は、その起源を共通一次にもつ。共通テストという形式そのものは、共通一次が初めてのものではなく、戦後間もない時期、占領軍の肝いりで進学適性検査が導入されている。旧制中学や、発足したての新制高校のカリキュラムとは直結せず、高等教育の適性吟味を目的とするものであった。国内の心理研究団体からの支持を得ながらも、大学、行政等からは歓迎されず、わずか5年と

いう短命に終わっている（寺崎2010）。共通一次/センター試験はその意味では安定した制度であるといえるであろう。

第80回衆議院文教委員会における共通一次導入時の議論の中で、文部省（当時）側の委員は、一次試験で基礎学力を、二次試験において志望分野に対する適性を測定、学力検査偏重の回避をその趣旨として答弁している。結果的に、この文教委員会における野党議員の指摘どおり大学間格差が明確に序列化された（佐々木・寺崎1983）。自己採点して出願できる「自己選抜」システム（鈴木2009）である以上、それは自然な帰結といえよう。

3-2. センター試験の評価

センターリサーチ（受験産業が行う、自己採点、合格可能性判定システム）による輪切りはことの是非は別として高校現場では自明のことである。その現実を直視した大学側の実証もようやく見られるようになっている（例えば高木2013）。

一方で難問奇問の排除などにおいては一定の評価（寺崎2010）もされており、この試験の廃止を提言している中教審答申も「高校生の基礎学力確保に一定の役割を果たしてきた」との認識は示している（2014中教審）。なお、毎年のセンター試験に対する具体的な評価・分析については大学入試センターHPで閲覧することができるので、ここではその詳細は省略する。

3-3. 一般学力検査以外の選抜

入試の学力偏重批判を受け、それ以外の方法も当然模索されてきている。国立大学の推薦入学は昭和42年に、AO入試は、平成2年慶応大学により開始されている。

推薦入試、AO入試ともに、一般入試で不利な専門高校や、大学進学実績の高くない普通科高校ではそれなりの評価をされていると思われるが、いわゆる進学校では、諸手を挙げて歓迎されているとはいえない。推薦入試やAO入試に対する不信感を高校側が抱く要因の一つは、受験産業の作成する入試難易度ランキングにおいて下位に位置する大学が実施する入試内容が、受験生確保、あるいは単なる受験生の学力検査忌避への迎合と見えてしまうことである。これらの大学では実際に個性的・学習意欲にあふれた学生を採れていないという研究（木村2011）がそれを裏付けてしまっている。受験過熱より学力保証に関心が移ってしまった時期に拡大した（倉元・大津2011）ことも不幸であったが、高校側の推薦、AOに対するスタンスには複雑なものがある（大谷2011）。

これらの入試方式に対する不信、不満から最近、学力検査回帰の傾向がみられる。AOに関わる批判に対しては、その成果を訴える報告（倉元・大津2011）、AO入学生の入学後を実証的に評価する試み（木村2011、林2011、2013）にも目を向けるのが公平であろう。また、「そもそも慶応SFCのAOは「エリート選抜」であった」（倉元・大津2011）ことも指摘しておきたい。なお、中教審答申では一般入試、推薦入

試，AO入試といった区分を廃止することを国に求めている。

4. 新テストに向けて

4-1. 「受験の厳しさ」が問題であった時代

1970年代にOECD教育調査団が日本の大学入試を評価した，興味深い資料がある（OECD教育調査団1972を寺崎2006より引用）。概略は以下の通り。

〈長所〉社会的素性に関わらない公正な制度のもと，勤勉さ，集中力，自制心などを養うことを通じ，すぐれた指導者，専門家を供給してきた。

〈短所〉青年層や家族に計り知れない社会的圧力をかけ，中等学校以下をゆがませており，入試成績が学問的能力の証明として重視され，学生の将来を決めるのに，わずかに一つのテストしか利用されず，18歳のある一日，どのような成績を取るかで人生が決まってしまう。

同様の評価は『18歳頃における一度限りの一斉受験という特殊な行事が，長い人生航路における最大の分岐点であり目標であるとする，我が国の社会全体に深く根を張った従来型の「大学入試」や，その背景にある，数値で採点結果を出せる問題を用いた試験の点数のみに依拠した「公平性」の観念という桎梏は断ち切らなければならない。』という表現で中教審答申（2014）にも登場している。

4-2. 時代背景の変化

かつて，共通一次導入の動機は「入試地獄」解消にあった。時代は大きく変わり，90年代以降，「受験競争」は存在感が薄れた。かつて教職員組合の批判対象であった文部科学省自身が受験競争打開に舵を切り，教育問題は「学力」論争等にその問題意識，社会の関心の重心が移動した（本田・平沢2007）。

少子化が進行し，18歳人口が減少する中，大学審議会や中央教育審議会は2007年～2009年ころに大学全入時代を迎えると予想していた。実際の状況はやや異なったものの，80年代終盤～90年代頭初をピークとした「受験バブル崩壊」を我々は目撃することとなった。世紀をまたぐ頃には受験産業の入試難易度ランキング表において，「不合格にならない最低学力ラインが設定できない」ことを意味する「F」表記が登場し始めている（丹羽2000）。こうした状況を，中教審（2014）は「知識量の多寡で進学先が決定されていた時期には，受験勉強が学習への動機付けになってきたが，大学への入学が容易になるにつれ，従来ほどには受験勉強が必要でなくなった。自主的に学習せず目標を持たない生徒が送り込まれ，主体性や明確な目標がないまま大学も終える」と分析している。受験勉強神話が無効になったとは思われず，後半部分には「今どきの若者は」論調が見てとれる。とはいえ，高・大接続現場に漂うもやもやとした悩みをうまく言語化しているといえよう。中教審答申では，「選抜力の低い大学」という慎重な言い回しで，そのような教育機関に向けた提案も行っている。

反対に、「選抜力の高い大学」(＝入試難易ランキング上位の有名大。筆者注)は「選抜力の高い大学」で入試の厳しきの議論というより、選抜が「正しく」行われているか否かという問題に関心は変化している。

入試改革に関しては、バカロレア等、欧米の方式を高く評価する記述は従来より存在(たとえば稲垣1987)している。当然のことながら、どんな方式も完全に理想的な制度など存在しない。海外の事例を美化する陥穽にはまりがち(広田、伊藤2010)であるだけに、慎重な評価が必要であろう。研究者の視点ではなく、海外からの留学生が語る各国受験事情を取り上げた記事(中日新聞2014年1月14日朝刊)も実態を垣間見る参考になるであろう。

4-3. どこを目指すのか

ところで、今回の答申の本質は、高大接続改革を実現せんとするところにあり、「高等学校教育、大学教育の抜本的な改革を実施」する(中教審2014)ことにある。その過程のひとつとして、大学入学者選抜が提言されているのである。しかし、一般社会の関心は、大学入試という制度という入り口の手続きに収斂してしまっている。

高校現場における最大の関心は、新テストにいかに対応するか、である。新テストが始まれば、それに対する技術的な練習を積ませる、という状況に高校が追い込まれていくのは目に見えている。本当に中教審の意図する、旧来の価値観に縛られた学習形態の打破につながるのであろうか。今回の諮問では、学習指導要領改訂にあたってなされた、不毛な「ゆとり」VS「詰め込み」の二項対立を否定した「確かな学力」を定義、大学にも高校にも序列・階層が存在するという現実も認め、それぞれに応じた学びのあり方、追求すべき理想が語られている。何を教える——学習内容(領域・分野、項目)——かの議論に終始するのではなく、学習方法、教授手法の根本的な見直し、改革が求められていると解釈できよう。そのためには、現場サイドでも哲学をもった教授手法の研究が必要であろう。

既成概念から自由になれず、固定観念にとらわれていては、今回の提言にあるような抜本的改革は現実のものとはならない。他方、目新しさのみに価値を見出し、単に古くから続いてきた技法だという理由だけで、これまで積み重ねてきた実践を頭ごなしに否定することも慎みに欠け、教育を迷走させる要因となりかねない。

筆者の自戒を含めて、哲学の欠落した議論でものごとを進めている限り、何年も経たないうちに再び表層的な「入試制度改革」議論を繰り返すことになる。今回の答申の目指すところ、それを実現するために提言されている諸方策の方向性が当を得たものであるのか否かという根源の吟味、が必要である。小文がその一助となれば幸いである。

■引用文献

朝日新聞デジタル2014年10月25日8:54配信。

中央教育審議会高大接続特別部会（2014）新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学選抜の一体的改革について，中央教育審議会高大接続特別部会第21回配付資料，文部科学省 web site（www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/）2014年11月1日閲覧。

寺崎昌男編（2004）「選抜と競争」，日本の教育課題第6巻，東京法令。

稲垣忠彦（1987）「教えること・学ぶことの制度化—学校の歴史と現在—」，教育の方法1 学ぶことと教えること，岩波書店。

高木繁（2013）「センターリサーチと個別試験受験者の成績分布からみた輪切りの実態」，大学入試研究ジャーナル第23号，大学入試センター。

大谷奨（2011）「進学重視校における進路指導と推薦/AO入試」，大学入試研究ジャーナル第21号，大学入試センター。

倉元直樹・大津起夫（2011）「追跡調査に基づく東北大学 AO 入試の評価」，大学入試研究ジャーナル第21号，大学入試センター。

「留学生に聞く各国入試事情」，中日新聞2014年1月14日朝刊。

鈴木規夫（2009）「共通試験制度における大学・学部層別化と選抜機能の評価」，大学入試センター紀要 No. 38, 2。

本田由起・平沢和司（2007）「学歴社会・受験戦争」，リーディング日本の教育と社会，日本図書センター。

木村拓也（2011）「国公立大学 AO 入試における提出書類の傾向把握」，大学入試研究ジャーナル第21号，大学入試センター。

林寛子（2011）「新たな入学追跡調査における選抜方法評価」，大学入試研究ジャーナル第21号，大学入試センター。

林寛子（2013）「大学入学時と卒業時における学生の「質」と選抜方法の評価」，大学入試研究ジャーナル第23号，大学入試センター。

丹羽健夫（2000）『悪問だらけの大学入試』，集英社新書。

広田照幸・伊藤茂樹（2010）『教育問題はなぜまちがって語られるのか』，日本図書センター。

■教授手法改革及び「テスト」に関する参考資料

ジョナサン・バークマン，アーロン・サムズ著，上原裕美子訳（2014）『反転授業』，オデッセイコミュニケーションズ。

河合塾編著（2014）『「学び」の質を保証するアクティブラーニング』，東信堂。

日本理科教育学会編（2013）「特集 ペーパーテストの可能性と限界」，理科の教育 Vol. 62, No. 736。

追加：本稿脱稿後の2014年12月22日に中教審が最終答申を行い（2014年12月23日中日新聞朝刊）新テストの名称，実施スケジュール案も明らかになった。不安と困惑を抱えた教育現場を置き去りにした上意下達的な改革とならないよう，現場からの議論を積み上げる必要性を強く感ずる。